

## 更なる進化を期待して



矢野眞和  
Works Review 編集委員  
昭和女子大学 人間社会学部 教授

「実務の分かる研究者」、および「研究のできる実務家」が求められるようになり、研究者と実務家の相互交流を促すことを目的として、学会や研究会などがいくつか立ち上がっている。政策の立案に関係する領域はその一例で、実務が分からなければ、実現性のある政策を提案する研究ができないし、実務の世界でも、短期的・短絡的な問題解決に囚われずに、長期的・体系的に研究する必要があるのだろう。

ワークス研究所の立ち上げも、Works Review の刊行も、こうした時代の流れから生成したのだろうと推察される。大久保所長は、創刊号のはじめで、「単に真実を明らかにするだけでなく、『企業経営の問題解決に役立つ』『個人のキャリアデザインに役立つ』『政策立案に役立つ』と書いていただいてこそ、価値があると考えています。私はよく『Profession Value』と『Academic Value』を両方とも得ようと、研究員に発破をかけています」という。

こうした民間企業の思いは、最近の大学改革

の動きと重なっている。大学にも「実務の分かる研究者・教育者」が求められ、民間から大学に転出する者や特認教授・客員教授といった（実態のよくわからない）肩書きをもつ民間人が急増した。大学人は象牙の塔に籠もった世間知らずだという批判が共有化されて久しいから、大学と実務の世界の合流は抗しがたい正論なのだろう。しかしながら、言葉で語るほどに生やさしいことではなく、合流すれば大学がよい方向に生まれ変わるわけではない。

ある大学を訪問した時の話である。創設されて10年も経たないその新しい大学は、教員の三分の二あまりを実務経験者から採用していて驚かされた。行政官・銀行マン・コンサルタントなどからの転出者で、多様性に富んだ教員スタッフの陣容だった。新鮮な知的刺激に満ちた新しい大学が生まれつつあるのは確かだが、実務家にも少なからずの弱点がある。実務家は、世間をよく知っているというのがウリだが、彼らの知っている世間は意外と狭い。日本の企業

内教育は、どの会社でも通用する一般訓練よりも、その企業しか役に立たない企業特殊訓練の要素が強いという話を思い出す。狭い世間で語られてきた言語は上司や部下の間では通用するが、20歳前後の若者との会話には馴染まない。15コマの授業に起承転結をつける大学の「講義」と実務家の慣れ親しんだ単発ものの「講演」とは大きく異なる。教授会の自治という殺し文句を観念的に神話化しているのは、むしろ実務家だったりする。大学経営は非効率だと民間人は揶揄するが、それはしばしば大学の教育・研究の意味が分っていない者の発言であったりもする。

ここで指摘したいのは、大学人からみた実務家の弱点ではない。大学の研究者と企業の実務家には基本的に異なった役割が期待されていることを承知し、その上で、お互いに信頼感をもつ必要があるということである。実務家は、問題の解決力とデザイン力が命だが、研究者は、個別具体的な問題ではなく、多様な問題群を普遍的に説明する力が何よりも大事だ。こうした力点の差異と役割をわきまえておかないと、研究者と実務家の交流は、実を結ばず、混乱する。

この難しい交流を有意義にする鍵が一つある。現状分析の力である。現実のデータを拾い集めて、それを組み立てる構想力と分析力が、役割の異なる研究者および実務家に求められる唯一の共通点だといってよい。アンケート調査による数量データであれ、半構造化のインタビューであれ、人間の一部をそぎとった断片に過ぎない。この断片をどのようにして組み立て、全体を構想するか。この「組み立て工学」がデータを扱う研究者と実務家に必要不可欠な技能だと私は考えている。この技能が優れていれば、両者の会話と信頼は必ず成立する。

論文審査の基準も、最終的にこの一点につきる。二回目になる論文審査の感想を述べれば、全体的に今回の論文の質は高くなったと思う。こうした経験が持続されれば、更なる進化が大

いに期待できると確信もした。

論文の質的向上に敬意を表しつつも、何かしら物足りない、という印象も受けた。インタビューのデータは、本当に、そのように語っていますか？データから導き出された叫びですか？アンケートの数量データは、本当に、そのように多変量解析されることを希望していますか？データが語っている声に応じて、分析技術を適切に組み合わせる工学が肝要だ。量的であり、質的であれ、分析技術だけに依存した解析はデータを殺す。

データをもう少し愛してほしい、といえは情緒的に過ぎるが、貴重なデータを生かそうとする慎重な気持ちがあれば、論文の質はさらに向上するはずである。そのように思わせる論文が多かった。「データをして語らしめる」という基本姿勢を保つ限り、研究者と実務家の壁は、実のところ、非常に低いものだと私は考えている。